

「日の丸・君が代」の押しつけではなく 卒業式・入学式を子どもたちを

励まし、成長を確かめ合う場に

励まし、成長を確かめ 合えるものに

子ども達にとつて、我慢を強いられるが多かった1年間だけに、子どもたちにとつて、自身の成長を確かめ、新たな旅立ちを励ましあえる場にすることが何よりも大切です。しかし感染防止の点からの制限もやむを得ないのも現状です。

その中でも、子どもたちの成長を確かめ合い、卒業していく子どもたちを励ますものにしていくために、各学校の教職員や保護者たちは心を砕いているところです。

様変わりしてきた

枚方の卒業式、

一方で、この卒業式に「日の丸」「君が代」の扱いをめぐって、本来の子どもたちの旅立ちを励ます式からして大きな違和感を感じさせてきました。

とりわけ、学校現場では、掲揚や斉唱を行わせるために、教育委員会からの強い支持と、厳しいチェック、地域によっては、斉唱時の音量や口元をチェックするなど、教育の場とはかけ離れたことも行われてきました。

もともと、小中学校では、卒業式を子どもの姿を見てもらえるように保護者と対面で実施したり、全校生徒で作ったホリゾンとを舞台に飾るなどして、創意や工夫を凝らして作っていました。

この取り組みは保護者からも支持されて、受け入れられていましたが、市教委が、式の内容を事細かに指示して、実施をチェックするなどして、画一的な今の式の形に様変わりしてきました。

そもそも、欧米では、国旗や国歌を歌わせるようなことがあまりなく、小中学校の卒業式そのものも行われていない国も少なくありません。

学校の自由や裁量権が 狭められた末に

この20年間の間に、学校や教職員の自主性や裁量権は、大きく狭められ、次々と上から求められる課題が増やされるとともに、厳しい教員評価や給与への反映などによって、現場や子どもの実態よりも、課題の遂行が優先される学校になってきました。

新学習指導要領、GIGAスクール構想、令和の日本型教育など、いつのまにか、学校の在り方そのものが全く別のもの

になろうとしていることさえ懸念されます。

学校・教職員の自由が狭められる中で、学校の取り組みが、子どもたちの幸せな未来につながるものとなっているのかどうか、今一考えていくことが求められています。



ICT教育・タブレットについて考える 立ち止まって考える(つむぎ)

コロナ禍で「学びの保障」として、タブレットが子どもたちの授業のあり方が大きく変わろうとしています。

しかし一方で、事前の準備も十分でない中、降ってわいたように、タブレットが配布され、教師自身の理解やスキルもない中で、配布されることで様々な課題や問題も現場から声が聞こえるようになっていきます。

ICTもタブレット端末も、優れた機能や大きな可能性があることは確かですが、導入に伴う、授業の中での本来の使い方や特性を押さええたと上の活用こそ重要です。また、子どもたちの使い方

にも、様々な問題が起きており、保護者からも、学校へ要望が出されることも出ています。

文部科学省も夏をめどにタブレットの使い方などについてQ&Aを作成していきたいとしています。

とりわけ、小学校中・低学年の子どもたちへの対応に戸惑いの声が聴かれます。

先行する海外の例でも、運用の見直しや効果への疑問、学力への影響から、計画を修正する国も出てきています。

職場からの声や実態も踏まえながら、ICTの活用のあり方を深めるためにも、今一度立ち止まって考える、率直な議論が必要ではないでしょうか？

考える力 紙とバランス

メリアン・ウルフ氏

(カリフォルニア大、神経科学者)
デジタル機器を使った教育には、注意が必要だ。脳が情報を処理する過程を踏まえると、欠点がある。

人間は、遺伝的に文字を読む能力を備えていない。先天的に神経回路がある言語や資格と異なり、読書のために反復学習で新たな神経回路を作る必要がある。端末の画面は情報量が多く、私たちは情報を同時に処理しようとなめ読みしてしまう。だが、子どもの教育ではゆっくり考えさせ、教官力や批判的な分析力を身につけさせる必要がある。子どもの脳の発達には、ゆっくり読め、より集中できる紙媒体で学ぶ方が望ましい。

5歳までは過程で多くの本を読み聞かせることが大切だ。深く読むことになれる10歳ごろまでは、可能な限り紙媒体で学習させ、集中力を高める機会にしたい。その後はバランスを取り、デジタル教材も取り入れながら、ポログラミングなどのスキルを高めてもいい。

欧州の若者17万人以上を対象にした研究では、デジタル機器より紙媒体で読む方が、理解度が高いことが分かった。幼いころからデジタルに慣れ親しむ世代ほど、紙の優位性が高かった。

紙媒体には、記憶を定着させる要素が多くある。レイアウトや形状を記憶でき、メモも書き込め、注意力も高まる。画一的な端末の画面での斜め読みは、読書体験を貧しくする。

「デジタル教科書を問う⑤」
12月5日読売新聞

大教組青年部大会2/6(土)に参加して 若い先生たちの切実な 願いや思いを取り上げて

緊急事態宣言が明けて久々にみなさんと顔を合わせたので、自分は代打で行ったが、みなさんの顔を見られて、とても嬉しく思いました。

また、こんな時でも集まれた方々も、集まりたい！と思っている方々も多かったんだろうと思っています。

また、青年部からの活動報告や、方針の提案についても、先生たちの切実な願いや思いが込められていて、若い先生たちが問題意識を持って発言し、行動していることに頼もしさを感じました。

パワハラ問題学習会

大会の中で行われた、パワハラの研修では、どういことがパワハラ、ハラスメントなのかを教えてくださいました。

海外では、このパワハラが使えないということで、まさに日本の負の文化、伝統の部分が根付いているのだなと思いました。

そして、そのことは服従関係に陥りやすい学級の中でも多いにあると感じました。

ない、とは思っていても、必ずしも、パワハラではないと言い切れない部分は自分にもあったかもしれない。そんなことを反省しながら、今後まずは教室内で自分の言動を気をつけていきたいと思いました。

あなたも、全教・枚方教組に加入を！